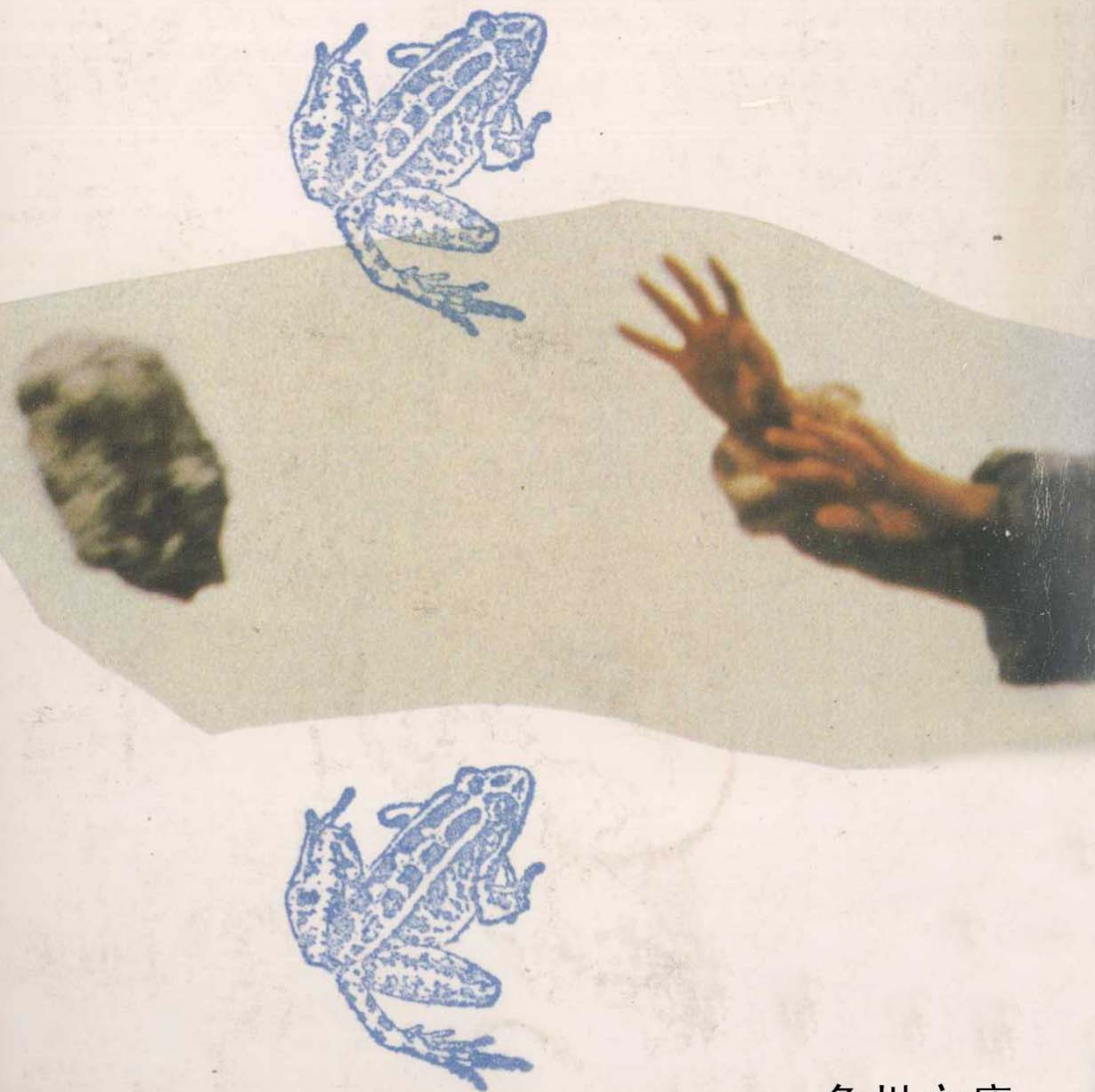


社会部記者レポート

ある中学生の死

読売新聞大阪社会部



角川文庫

ある中学生の死

よみうりしんぶんおおさかしやかいぶ
読売新聞大阪社会部



角川文庫 5667

昭和五十九年三月二十五日 初版発行
昭和六十年一月三十日 五版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三—三

編集部(〇三)二三八—八四五一

電話 営業部(〇三)二三八—八五二一

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所 暁印刷 製本所 本間製本

装幀者 杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ある中学生の死

読売新聞大阪社会部



角川文庫 5667

目次

ある中学生の死

五

マイホーム崩壊す

五三

野良犬コロはどこへ行った

一〇五

お父ちゃんを返せ

一六三

パンの耳

二二五

真実に近づくために（あとがきにかえて）

二八三

解説

村崎芙蓉子

二八六

ある中学生の死

謎の自殺

非情な取材

大阪府警本部の記者クラブから社会部につながっているホットライン（直通電話）が、また鳴りだした。さっき、麻薬事件の長い原稿を受けて「さて、いまのうちに晩めしでも食っておくか」と、ひと息つきかけていた遊軍の山田武弘は、舌打ちしながら受話器を上げた。「今度は中学生の自殺ですわ」「中学生？ 受験生でっか」問い返しながら山田は編集局の大時計を見た。午後八時半をまわっていた。

昭和五十×年九月××日、日曜日。夜勤デスクの石禾欣^{いさわきん}は「中学生自殺」と聞いて、例のかん高い声をあげた。「またか。山ちゃん、現場へたのむよ。それにしても九月の新学期になって何件目やねん。だれか資料部に電話して調べてや」

まだメシを、などとは言っておれない。山田は、カメラマンの氏原治と本社を飛び出した。入社十年の記者と七年のカメラマン。編集局では若手の方だが、中、高校生とは、もう世代が違ふ。「なんで死ぬんやろう」ともに考え込んだまま、口を開く気になれない。

北大阪市の国鉄北大阪線浪速^{ななす}駅東六百メートル。中学生が電車に飛び込んだという現場の線路わきには、自転車^{自転車}が乗り捨てられ、人だかりがしていた。氏原がストロボをたいた。山田は

警官を見つけて取材を始めた。

発生 午後六時十八分

自殺者 北大阪市の会社員原田明夫さん(五)の長男、徹夫君(二) (市立第一中学校三年)

家族 両親と姉三人

電車 下り五両編成、佐川敏雄運転士(三)

「なんで死んだんやろ」メモを取るのもどかしく、山田は警官に尋ねた。

「わからんなあ」

「中学三年やし、進学の悩みでも？」

「どうかな。父親は『勉強せい、勉強せい』言うとならしいが」

近くの同級生宅で、クラス写真から徹夫君の顔を複写させてもらい、北大阪警察署へ。もう朝刊の締め切り時間が迫っている。山田は時計をにらんで、奥の刑事部屋に入った。間もなく、刑事課長の記者会見が始まった。

「受験ノイローゼかとも思ったが、最近、学校の成績がよくなって、両親も喜んでおったというんだな。遺書もないし、原因は全くわからん」刑事課長は、怒ったように答えた。

会見が終わって警察を出ようとする、入り口の横の長いすに五十歳ぐらいの男が、うなだれて座っていた。山田が「お父さんでは……」と声をかけると、男は肩をふるわせながらうなずいた。そのとき、横の男が荒々しく立ち上がって「帰ってくれ」となった。

自殺者の家族、交通事故で死んだ子の親……新聞記者として非情な取材は何度もしてきた。

そのたびに「記者のむごさ」も感じてきた。仕事の厳しさだ、と教えてくれた先輩もいたが、十年記者の山田には、目の前の父親に、もうひと声をかける勇氣はなかった。

取材再開

日曜夜勤の山田が空腹を押えて取材した北大阪市立一中三年、原田徹夫君の飛び込み自殺は、翌日の朝刊社会面に写真つきで大きく掲載された。

昭和五十一年に大阪の教育界を揺るがした「偏差値・業者テストの弊害是正」キャンペーンを手がけてから、社会部の教育取材班のキャップを務めている千々岩和美は、朝食のハシをとめて、まだ、あどけなさが残る徹夫君の顔写真を見つめた。「こんな子がなぜ死ぬんだろう」千々岩は、記事を何度も読み返し、切り抜いて「教育問題」のスクラップ・ブックに張りつけた。出勤すると、教育取材班の藤本晋と永井芳和が、気むずかしい顔で待っていた。「自殺の問題……」と最後まで言わずに、行動派の永井が「やらなあきまへんな」と、もう立ち上がっている。慎重派の藤本は「自殺者の気持ちなんて、本人しかわかりませんよ。いや、本人もわかっていないかもしれませんよ」と、皮肉っぽい口調で応じた。しかし、千々岩から見ると、それは藤本が、口ぶりとは反対に、心を動かされている証拠だった。

そのまま年が明けた。新しい事件がつつぎつつぎに起こる。三人とも徹夫君の死にかかわってはいらなかった。だが、三学期がはじまると、東京、大阪、京都、兵庫……と、また各地で小中、高校生の自殺が相次いだ。

「受験期また自殺

高校生ビルで飛び降り」

「女子中学生阪急に飛び込み

なぜ”泣き崩れる両親”

千々岩のまぶたに、あのあどけない徹夫君の顔が浮かんた。①十四歳 ②九月 ③わからな
い死——は、警察庁の『少年自殺白書』が浮き彫りにした現代っ子の自殺の典型でもある。取
材しなおしてみよう。「上っ面の追跡ではだめだぞ」——社会部長の号令を背に、三人は北大
阪市へ向かった。

山田が取材してから五か月経っていた。現場には二月の寒風が吹き抜け、レールは冷たく光
っていた。「こんなところで……徹夫君は、なにを思いつめたんやろうな」藤本がつぶやいた。
黙禱して北大阪警察署へ。

「いまごろ、なにごとですか」

大田新平刑事課長は、大きなデスクの向こうから、いぶかしそうに三人を見すえた。取材の
趣旨を聞いてうなずくと、ロッカーから「変死事件報告書」を取り出し、説明を始めた。

「まず、電車は時速五十三キロで現場にさしかかった。九月とはいっても、午後六時十八分
で、直前まで雨が降り、もうあたりは暗くなっていた。突然、二十メートル前方の左側から男
が飛び出した。運転士は非常警笛を鳴らし、ブレーキをかけたが間に合わず、はねた」

「先頭の車両が百二十メートル過ぎたところで、ようやく止まった。遺体は電車の最後尾車両の下から見つかった。赤の横ジマTシャツにジーパン姿だった。その近くに折りたたみのカサ、野球帽、緑色のつっかけ草履が残っていた」

——自転車は？

「うん、ミニサイクルが、線路ぎわのサクの外側に止めてあった。そこで自転車を降り、そばに転がっていたドラムカンを踏み台にして、高さ一・八メートルのサクを乗り越え、線路上に飛び出したようだ。変死扱いになってはいるし、遺書はなかったが、自殺に間違いない」

大田課長は、これで終わりというように、パタンと報告書を閉じた。こちらが知りたいのは、徹夫君の心の中だが、その点について、報告書はなに一つ語ってくれない。

未完の調書

大田課長の態度は、コロシやタタキとは違う、徹底的に追及することもあるまい、と言っているように見えた。取材班にも、そういった気持ち少しはあった。でも、きょうは、それを振り切って取材に来たはずだった。

永井が食い下がった。

「両親から調書を取った人はいませんか」

「さて、あのときは」刑事課長の声を聞きつけて、山岡道男捜査係長が、押し出しのいい体をゆすぶってやって来た。

「あの晩、うちの山田記者も父親に会ったのですが、話を聞けなかった。父親は、係長にはどう言うてましたか」

「それがな、わしが一時間ほど事情を聞いたんじゃが『日ごろ、息子とは接触がないからわからん』と言うだけなんや。それで、あらためて母親に来てもらうことにするから、通信簿や、なにか書いたものがあつたら持たせてくれ、と頼んで帰らせた。父親は『わかりました』と頭を下げて出て行つた」

藤本「それだけ？」

山岡「それだけや」

千々岩「で、母親は？」

山岡「半月ほどしてから、やっと来てくれた。そのときの話によると——徹夫君は、高校受験に備えて勉強するようになり、安心してゐた。あの日も午前一時ごろまで勉強した。午後二時ごろ、ナシをむいてやると、かじりながら自転車に乗って出て行つた。六時ごろになって帰りが遅いのには気づき、友達のところへでも行つたのかと捜しに出た。線路のところまで来ると黒山の人だかり。飛び込み自殺だとわかったが、二十五、六歳の男という話だったので、別に気にも止めずに帰宅したそうや」

藤本「それで」

山岡「主人に話したら『そうか、だれやろな』と言いながら出て行つた。ところが、うちの自転車があつたんで、びっくりして線路の中に入ったら、徹夫やつた——」

千々岩「ショックだったでしょうな」

山岡「そらそうや。徹夫君は平素、無口でおとなしく、両親に対して理屈を言うようなこともなかったらしい。学校の成績も『中』ぐらいということ、まずまずやな」

「おかしいな！」じっと聞き入っていた永井が、突然、大声をあげた。「そういう、まあ素直でおとなしい子が、午後二時ごろ、いつものように遊びに出て行った。それが、六時ごろまで帰らないからといって、騒ぎ出した。なんでやろ」

「それやがな」山岡はテーブルをたたいた。「わしも、おかしいと思うた。なにかがあったんや。そういえば、母親の話では、葬式のあと、作文が見つかったそうや。『中学になると高校受験をしなければいけないが、体が動かない。しかし、母さんに注意されれば勉強ができる』という意味のことが書いてあった、と言うとったな」

「時間をとらせて、どうも」と三人は立ち上がった。

警察での取材は、予期した以上のもではなかった。「やっぱり両親に会うしかないな。その前に、最後の目撃者、運転士の話聞いておこう」――。

国鉄北大阪電車区で会った佐川敏雄運転士は、徹夫君の最期を、きのうのこのように語った。

「当たる瞬間、体を伏せました。ひょっとしたら、よけたかったのではなかったりしてね」両親を訪ねる足取りは、また重くなった。

口を閉ざす親

原田徹夫君の家は、彼が死んだ国鉄北大阪線浪速駅から歩いて二十分ほどのところにあった。藤本と永井の二人が初めてその道をたどったのは、取材を再開してから一週間後のある夕方だった。事前に電話はしていなかった。

「突然訪ねると、家族をびっくりさせるけれど、こんな取材を電話で申し込むこともできないし」という千々岩の指示があった。もとより、二人とも、電話で話を切り出す気になどなかった。自殺当日、取材した山田が、警察で父親の明夫さんにもうひと声かける勇気がなかったと同じように、藤本と永井にとって、五か月後の今とて、それは気の重い訪問であった。

「先輩、これからこの道を何回通うことになるんでしょうね」

永井がふともらした言葉が、取材のむずかしさを予感する二人の気持ちを代弁していた。

原田家の玄関にはもう灯がはいっていた。呼び鈴を押すと、窓が開いて母親らしい顔がのぞいた。二人は名乗って玄関のたたきに入れてもらった。奥から父親の明夫さんがコート姿で現れた。会社から帰ったばかりだという。

「実は……」藤本が取材再開の気持ちを話した。いつもはわりにスラスラとしゃべる藤本が、この時は、何度か口ごもった。徹夫君は一体、どんな思いで線路に立ったのか。轟然と驚進してくる電車の前に立ちはだかる、そら恐ろしいまでの強い意志を、十四歳の小さい胸に巣食わせた絶望とは何なのか。何か言いたかったのだろうその気持ちを、だれもわかってやらずにいいのか。そんなことを言いたかったのだが、いくら言っても言葉が足りない気持ちだった。

「もう、思い出しくたないんですよ」

そばにいた母親が答えた。俊子さん（哭）。その声は痛々しく、表情も硬かった。妻をかばうように、明夫さんは「他のことならね……」と、話題を変えて、それでも十五分ばかり藤本と永井の相手をしてくれた。最初の訪問はそんな立ち話だけで終わったが、残された人たちの心の傷跡に、藤本も永井も胸を締めつけられた。

二人から報告を受けた千々岩が「それではボクも行ってみるよ」と言った。そう簡単に心を開いてもらえるとは、はじめから思っていなかった。

再訪は、千々岩と藤本の二人だった。

俊子さんの表情は、相変わらず硬かった。明夫さんはまだ帰宅していなかった。また玄関の立ち話になった。

「私が仕事から帰ってきたら、お母ちゃん、今晚のおかず何するのん、いうて（徹夫が）買ひ物袋を開けたりして……。もう家に帰ってきててもせいがなくて……」

共働きらしかった。もう語りたくない。そのくせにひとりでに胸の内から言葉があふれ出ているようであった。

「一人で家にいるのが不安で、仕事から帰ると、お父さん、早く帰ってくれないかなあと思うんですよ。このごろや々と一人でおれるようになってきましたか……」

しばらくして明夫さんが帰ってきた。藤本の姿を見て、またかという表情になった。

「あんたたちの気持ちはわかりました。そやけど、私も、まだ家に帰るのにわざわざ中学生

の姿を見ないように時間を変えたり、道を変えたりしているくらいでして……つらいから。年とってからの子供でしょ……だから、もう楽しみがなくて、会社もやめたくあるときがありません。それに、そんなに話すことなんてあまりないですし……」

明夫さんは、ときどき声をふるわせて、とぎれとぎれに話した。両親の悲しみの深さと徹夫君へのいとおしさが、千々岩と藤本にも伝わった。

帰り道、また、二人の足は自然に現場の線路わきで止まった。

「あんなに家族を悲しませるなんて……子供たちがそれをもっと考えてくれたらなあ」と藤本がつぶやいた。千々岩は、ちょうど灯りを満載した下り電車が目の前を通り過ぎ、闇の中に消えるのを、ボンヤリ目で追っていた。

戸惑う教師

徹夫君の両親の心は、やはり深い悲しみに閉ざされていた。自殺の原因どころか、あの日の行動の一つ二つさえも語ってくれない。「学校へ行ってみよう」藤本が無精ヒゲをさすりながら永井をうながした。

三月初めの午後、北大阪市立第一中学校の校門前で本社の車を降りると、張りつめた表情の母親たちが、何か書類を手に、校舎から出てきた。一日から始まった大阪府の公立高校入試の願書受け付けは、例年に比べて出願者の出足が鈍い。母親たちは、わが子の出願をどうしたらいいのか、最後の相談に來たのだらう。藤本も永井も、徹夫君の母親の顔を思い浮かべた。彼